

上海万博を見る
——中国の将来像を国民に示す

(中国研究所所員) 中島 宏

上海万博のアイデアを最初に中国に提案したエコノミスト、竹内宏さん（元長銀総研理事長）に同行するツアーに参加し、万博を見てきた。日本の政府館と日本産業館、それに中国政府館、テーマ館の都市足跡館を見物。後はフリーの時間に、70歳以上の高齢者優遇をしているフランス、英国、ロシア、ブラジル、カナダなどのパビリオンを見た。年齢を証明するパスポートを振りかざすと、中を確認することもなく簡単に入れてくれた。顔を見れば分かるということ？ また日本人の間で意外な関心と呼んでいる北朝鮮やイランなどの館にも入ってみた。

5月に開会したばかりのころに入館をめぐり少し騒ぎがあったが、私が行った5月末から6月初めにかけては、大きな混乱もなく順調だった。それぞれの門から所持品チェックを受けて入場、お目当てのパビリオンに並んで入るまで全く問題がなかった。全体に参列者のマナーは合格点。入場者の服装もこざい。ごみを投げ捨てる者もあり見かけない。会場内も汚れがあればすぐに清掃員が掃除をする。トイレも簡素な便器ながら、まずは清潔。一部に不十分なところも見かけたが、昔よく見た北京の公園や動物園のごみの山、汗臭い夏シャツの行列などを思えば別世界だ。

◆中国館、日本館、サウジ館が人気

黄浦江東岸に立ち並ぶ各国のパビリオン地区では、中国古代の冠をイメージしたという、ピラミッドを逆さまにしたような真っ赤で巨大な中国館は別格。外国館では、蚕の形をして「紫蚕島」（日本名：かいこじま）と呼ばれる、幻想的な薄紫色の日本館は超人気館の一つ。しかし私が行列

に並んでいる人たちから聞いたところでは、待ち時間の長さはサウジアラビアの7時間が最も長く、その次が日本、ドイツの5時間、次いでフランスの4時間、英国の2時間という話だった。もちろん日によって違うだろうが、これがおおよその人気順ということか。またアメリカや他の欧州諸国の館、韓国館なども人気があり、長い行列が続いていた。中国館は予約券があれば入場できるので、待ち時間はないが、予約券を入手するのに朝から2、3時間は並ばなければならない。

中国政府館では、北京故宫博物院が所蔵する、北宋時代の都、汴京（開封）の繁栄を描いた絵巻物「清明上河図」を全長130メートルの巨大スクリーンに再現した動画が前評判どおり圧巻だった。1000人以上の登場人物が川沿いの街で歩き回り、居酒屋が見え、馬車や船も動き、人々の声まで聞こえてくる。カメラ禁止のはずだが、記念撮影で大賑わい。中国館のその他の展示や、古代都市を見せるテーマ館の内容を見ると、中国指導部が、「都市化と環境、より良い生活」を今後の国家課題として、いかに強く意識しているかが伝わってくる。

日本政府館は、日本が古代中国の文化を学んだ歴史を描いた画像から始まり、日本の最新環境技術の紹介、トヨタ自動車が介護支援のため開発したロボットがバイオリンを弾くなどのアトラクション、日中協力によるトキ再生をモチーフとする音楽ショーなど盛沢山。日本らしくきめ細かな配慮、中国向けの気配りが感じられる展示であり、中国の参観者に人気なものよく分かる。またこれとは別に、黄浦江の西側地区にある日本産業館も日本らしいこまやかさで成功していた。民間企業の22社と横浜市、静岡県が出展しており、人気は3D映像で紹介する最先端の医療技術やINAXの「世界一トイレ」。その後、金箔のトイレが展示されたようだ。

フランス館は近代都市の映像や名画など、内容

はともかく、さすがにしゃれた展示だった。予想外に良かったのはロシア館。未来の都市像を塑像で表現するなど、ロシア人らしい詩的なイメージが成功している。イランは各種の高級絨毯が目玉で、高価な値段で即売。北朝鮮館は平壤の街の映像と高句麗壁画のレプリカ程度だが、出口で売る切手集が人気の的。空中に浮かぶ船のような奇抜な外観と砂漠の3D映像などで人気のサウジ館や、ドイツ、アメリカなどの有名館は優遇制度がなく、時間の関係で残念ながら割愛した。

◆都市と生活がテーマ

過去の万博の歴史では、開催国の先端産業技術を世界に誇示するスタイルが多かった。それが愛知万博からテーマが「環境保全」に変わり、今度の上海では途上国も含め、各国が取り上げやすい「より良い都市、より良い生活」をテーマにした。参加国が246の国・地域・国際機関と史上最大を誇っているのも、参加しやすいことがあるという。また貧しい国には総額1億ドルにのぼる建設費を援助した。各国共に自国の都市の自慢や、理想的な都市のイメージを工夫して売りにしている。それに多くのパビリオンは、建築家が腕を競って製作した前衛的な形の建物が勢ぞろいしており、外観を見て歩くだけでも面白い。

私の行った当時は、まだそれほどの暑さもなく、入場者も最初の2日間はいずれも31~32万人程度だったので快適だった。だが最後に行った6月4日には、入場者が45万人近くに増え、相当に込み合う感じだった。写真を撮ろうとしても人の頭が入ってしまい写真にならない。日本人を含む外国人は時に見かける程度で目立たなかった。

今度の万博は、日本の大阪万博の入場者記録6400万人を上回る7000万を目標としており、10月末まで184日間、1日平均38万人以上でないと達成できないことになる。入場者は、6月5日で計1000万人、同28日で2000万人を突破した。目標の

7000万人を目指して、今後、学生の夏休みなどに相当な動員がかかるだろうから、夏の猛暑のころは大変だ。日陰が少なく、各所にあるはずのドライミストもあまり目にとまらなかった。今後は暑さ対策が必要だ。

会場内の案内は大変親切で、態度も良かった。多くがボランティアだ。また会場内のエコ・バスなどをうまく使えば交通もほとんど問題がない。全体の会場の管理は合格点といってよい。

運営上の問題といえば、人気館に入る待ち時間があまりにも長いこと。中国各地域から来る観客の経費は、彼らの収入から見ると大きな出費だが、それが報いられないとすれば不満が大きいだろう。普通の国と違う「人口大国」に適したアイデアがもっと必要だったかもしれない。

今でも混乱の要素がないわけではなく、日本のSMAPのイベントを中止したのも、そのためだろう。今後も、少しの手違いで騒動が起きる可能性はいつでも残っている。

ところで私が利用した「優待」の入場は、高齢者だけでなく、病弱者、幼児などに対する優遇だが、その後、健常者が車椅子に乗り、病弱者を装って入館するケースが非難を呼び、優待をやめている館もあるという。また各館のスタンプ集めが大流行で、会場内での混雑が目立っていたが、これも中止したところもあるとも伝えられる。

◆中国の「日本再発見」を促進？

竹内さんは1984年に北京で王震中日友好協会名誉会長に会った際、上海での万博開催のアイデアを提案、王震氏は目の前で当時の汪道涵上海市長に電話した。竹内さんは汪氏に会い、長銀を中心に日本企業各社とともに研究チームを立ち上げ、上海市と共同研究、さらに中国側の人材教育なども含め協力したという。今度の訪問では、上海万博の周漢民執行委副主任が竹内さんとわれわれ一行を昼食に招き、竹内さんの貢献に謝意を示した。

中国側は竹内さんを9月の80歳の誕生日を祝うため上海に招待している。日中協力の明るい話だ。

万博は今までのところでは、いろいろ問題点もあるが、総合的に見れば成功している、というのが実感だった。ある中国の知識人が「今後の中国の進む方向が理解できた」と語っていたといわれる。国民に「都市化と環境、より良い生活」という、今後の発展の目標を示し、国論の統一を図る方針が浸透しつつあるということか。その意味では、日本館、産業館が見せる日本紹介のきめ細やかな展示の役割は重要と思われる。中国が目指す将来の国民生活の有力モデルの一つが日本であるのは間違いない。その日本への強い関心を集め、中国における「(侵略戦争の日本でない)日本の再発見」ともいうべき最近の風潮をさらに促す役割を果たすのではないか。

ただ同時に、全国各地からやって来る庶民が、世界の近代都市についてこれほど多くの情報を仕込んで帰った後、現実とのギャップをどのように考えるだろうか。恵まれた階層とそうでない階層の間で逆の結果が生まれるかもしれない。

◆億ションの波——格差

上海ではまた、高さナンバーワンの上海環球金融中心ビル100階の展望台(474m)に上ってみた。真ん中部分がガラスで真下が透けて見えるのには高所恐怖症の私は肝っ玉が縮む思い。万博会場も見えるが、それよりもびっしり並ぶ億ション(円換算)群。このビルのすぐ近くに並ぶマンションは1㎡当たり10万元というから、標準の広さの150㎡で計算すると日本円でほぼ2億円(1元13.5円)。中国の習慣で内装は別なのでこれでは済まない。

帰国の際にタクシーで浦西から浦東空港に行く途中見た、数年前、建設のマンションは1㎡当たり4万元くらいというから、同じ計算で内装別で約8000万円、空港に近づくとも1万元ほどなので、

2000万円。他に比べてまだ安いので、今後さらに上がる、というのが運転手君の話。

中国旅行ではいつもタクシーに乗る度に、運転手の手取り収入を聞くことにしているが、今度、上海で数人に聞いたところでは、3000元から5000元という答え。数年前まではずっと2000～3000元だったので、それよりは上昇している。彼らの労働条件は実に過酷で、年中休み無しだったが、今度は年に1ヶ月、1100元をもらって休暇が取れるシステムに変わった例が1例だけあった。この人の月収3000元、妻が1000元余なので、合わせて4500元(約6万円)。中産階級に入ろうとするレベルだが、大学受験の子供を抱え生活はきついという。それに風邪をひいただけで300元以上もかかるなど医療費が大変だとこぼす。

万博見物に来ていた、浙江省温州の労働者は月収2000元、万博見物は1泊2日で750元のツアーという。また広東省の深圳から来た、野球用品会社の30代半ばの独身OLは月収5000元。上海の知人宅に泊まって万博を見るので、900元余の飛行機代で間に合うと話していた。

古くからの知人に10数年ぶりに会うと、以前とはすっかり違って裕福な境遇に変わっていた。夫妻で月額計1万3000元(約17万5000円)の年金に250㎡のマンション。医療費は全額補償。息子も会社経営で成功しており、お金が余るので、何人かの友人と共に、地方に小学校を寄付する運動をしており、もう20校近くも建てた。最近裕福な人の間で寄付をする人も増えているという。

他方、ある企業のオーナーと取引があるビジネスマンの話では、年収が4000万元(約5億4000万円)、資産も巨額だが、個人の生活ではせいぜいゴルフくらいしか金の使い道がない。今は海南島に別荘を買って楽しんでいる。彼は外国旅行がため、国内の気楽なところということで海南島を選んだという。中国の階層間の格差は言われる通り様々な形で広がっている。(了)